

6 2003年度の現場後代検定成績からみた種雄牛の特徴

ねらいと成果

肉質、肉量ともに優秀な種雄牛を造成するために現場後代検定法を実施している。2003年度は鶴田土井、北本土井、北桜波、照波土井、鶴仁土井、光照土井、光安土井の検定が終了した。検定成績をもとに育種価を算出したところ、照波土井、鶴仁土井、初の養父郡産種雄牛として注目されていた光照土井、光安土井が優秀な産肉能力を持っていることが判明し、今後の活躍が期待される。

内容

現場後代検定法は、1種雄牛当たり16頭の産子(去勢牛)を検定調査牛とし、肥育農家と農業技術センターで8頭ずつ肥育して得られた枝肉成績から種雄牛の産肉能力を判定するものである。2003年度に検定が終了した種雄牛についてその概要を表に示す。

枝肉重量は鶴田土井、照波土井、鶴仁土井、光照土井で平均390kg以上となったが、光安土井はかなり期待値を下回った。脂肪交雑平均値では光照土井が6.1、光安土井が5.9、照波土井が5.7と高い成績であった。特に光照土井はA-4以上が93.8%であり過去の検定成績と比べ最高であった。これらの

成績をもとに育種価を算出し、枝肉重量と脂肪交雑について図に示した。鶴仁土井の枝肉重量は第2安鶴土井の息牛では最高であり、脂肪交雑では光安土井、光照土井、照波土井の評価が高かった。

今後の方針

光照土井、鶴仁土井、光安土井、照波土井は2004年度から供用するが、光安土井は遺伝病の関係上条件付きの供用となる。今後ともさらに優秀な種雄牛を造成するためにより一層の検定精度の向上を図る。

野田昌伸（北部農技・畜産部）

表 現場後代検定枝肉成績の概要(平均値)

種雄牛	枝肉重量	ロース芯面積	バラ厚	皮下脂肪厚	脂肪交雑
鶴田土井	393kg	48cm ²	6.6cm	2.7cm	4.7
北本土井	376	49	6.5	2.5	4.6
北桜波	372	52	6.5	2.3	4.6
照波土井	393	54	6.9	2.5	5.7
鶴仁土井	396	51	7.1	2.4	4.9
光照土井	397	54	7.0	2.4	6.1
光安土井	355	53	6.4	2.2	5.9

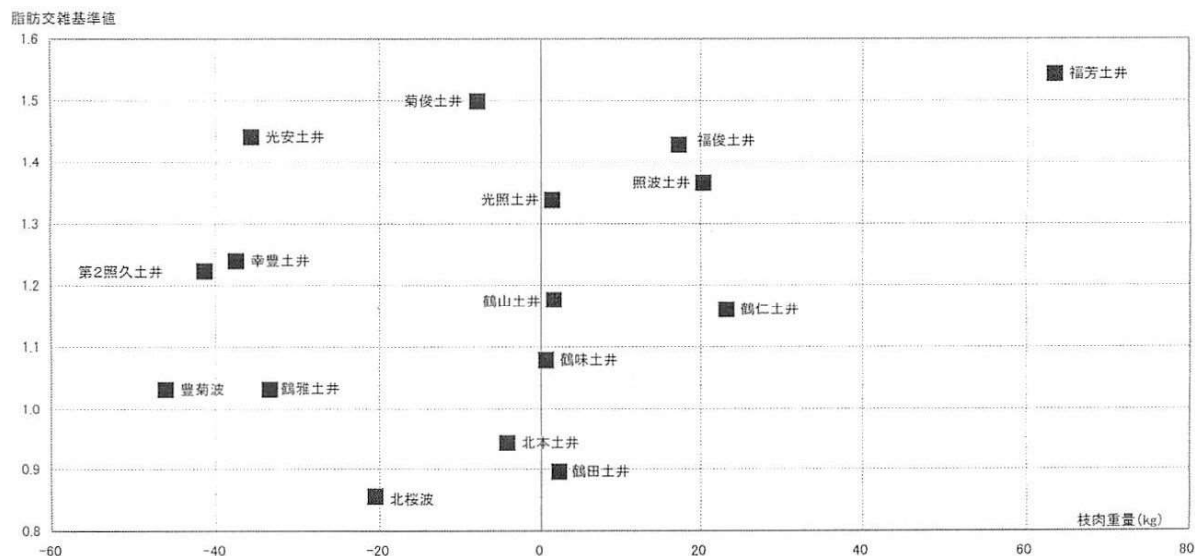


図 種雄牛の育種価分布状況(2004年2月)